

全国邪馬台国連絡協議会会報

邪馬台国新聞

発行所 全国邪馬台国連絡協議会事務局
 発行者 鷲崎弘朋
 〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目2番15号
 浜松町ダイヤビル2F
 Tel.090-3218-8622
 URL <http://www.zenyamaren.org/>
 E-mail info@zenyamaren.org

会報 『邪馬台国新聞』

第8号の発行によせて

会長 鷲崎 弘朋

文化財保護法改正と仁徳天皇陵発掘調査

宮内庁と大阪府堺市は、日本最大の前方後円墳「大山(だいせん)古墳」(仁徳天皇陵、5世紀頃築造の墳丘長約500m)の保存対策の一環として、11月下旬から12月上旬まで、共同で発掘調査を行うと発表した(10月15日)。従来、歴代天皇や皇族の墓とされる陵墓への立ち入りは厳しく制限されており、外部機関を交えて陵墓を発掘するのは初めて。調査は墳丘を三重に囲む濠(ほり)のうち、最も内側の濠に接した「第1堤」の護岸整備に向けた基礎資料の収集が目的で、図の3カ所を掘削する。埴輪(はにわ)片などの遺物や遺構が見つければ、より正確

会報第8号目次(敬称略)

会長挨拶	1
会員研究発表会概要報告	
第8回会員研究発表会	2
第5回講演会	2
ワーキンググループ活動報告	2
顧問投稿	2
巻岐一郎、大谷光男、大平 裕、小田静夫、 関 裕二、西川寿勝、宝賀寿男、森岡秀人	
会員投稿	13
山科 威	
わが図書を読む	15
黒澤一功、海戸夕真、深田浩市、 村山智浩、山田昌行	
編集局だより	16

な築造年代などが分かる可能性がある。この大山古墳を含む「百舌鳥(もず)・古市古墳群は2019年の世界文化遺産登録を目指している。また、日本考古学協会などは陵墓の公開を求める活動を続けている。

〔速報〕11月22日、大山古墳で5世紀の円筒埴輪(直径約35cm)13個を発掘。また、平面部でこぶし大の石敷きを確認(宮内庁、堺市)

もう一つの動きとして、平成30年の第196通常国会(1月7月)で、文化財保護法が改正された。市町村に国の権限を一部委譲し、国指定文化財を活用しやすくし、また手続きを弾力化し地域活性化を後押しする狙いがある。来年4月より施行される。

これは、文化財活用について、従来の保護重視から保護と活用の両立へ方針を転換したものである。あらたな枠組みでは、市町村が地域にある国指定文化財の保存・活用策をまとめた「地域計画」を作り、国に申請する。都道府県は総合的な施策の大綱を作ることが出来、市町村は地域計画を作る際に考慮する。

国が計画を認定した場合、市町村は計画に定めた期間と範囲の中で、国指定の文化財の現状を変更できる。すなわち、市町村は計画の範囲内であれば自由に「現状変更」が可能となり、その都度の国の許可は不要となる(市町村が主体というのがポイント)。

今回の仁徳天皇陵発掘調査が宮内庁と堺市の共同発掘調査になったこと、文化財保護法改正が、どのように関係したのか判然とはしない。しかし、今後は古墳や遺跡の調査に市町村が大きく関与するケ

大山古墳(仁徳天皇陵)



(読売新聞掲載図)

スが増えることも予想され、古代史解明には朗報である。

古代史解明を掲げる全邪馬連としても、これは朗報である。現在、当会は重要テーマでのワーキンググループ(WG)3つを設置し、本格的検討に入る予定である。①年輪年代と科学的年代論-A・経向遺跡の桃種の年代測定結果が発表されたので解析や当会の今後の対応を検討。B・岡山県上東遺跡の桃種9、600個の年代測定等も検討。②庄内式土器研究(古墳発生前の土器)・③漢鏡7期の研究(三角縁神鏡との関係を含む)。

以上3つのWGでの今後の本格的検討において、文化財の調査や科学的年代測定が必要なケースも想定される。その場合、今回の文化財保護法改正を踏まえ、文化財が実際に存在する市町村、および都道府県・大学・研究機関・日本考古学協会などの学会・文化庁等と、どのような協力関係構築及び取り組みが可能かを、特別顧問の先生方のご指導もいただきつつ進めるべきである。

会員研究発表会概要報告

第8回会員研究発表会

第8回会員研究発表会は平成30年9月30日に開催の予定でしたが、台風のため11月2日に延期して開催されました。各氏の発表は以下の通りです。(敬称略)

●木本博【演題】倭人伝の脱字と「卑弥呼」の意味

【要旨】今まで誰も指摘しなかった『魏志倭人伝』の脱字。これを明らかにすることで、新解釈を示します。

●金田弘之【演題】情報理論から見た魏將軍・司馬懿と女王(邪馬台) 国の関係 【要旨】魏志が記す諸記述(行動)は司馬懿の命令で実行されていることを検証。

●神尾忠和【演題】倭人伝の語源を探る(その2)

【要旨】中国語と韓国語、韓国語と日本語、日本語と中国語が融合した音訓を借りて、漢字で表現した文字を解明します。

●村山智浩【演題】タイトル 魏志倭人伝 周旋5000里の解釈 【要旨】周旋五千里は魏志倭人伝全文中、倭の情報のまとめの位置にある。しかし解釈はまとまりを見ない。その方法論を解きます。

※次回講演会には金田弘之が登壇します。

第5回講演会

平成30年10月28日(土) 第5回講演会が開催されました。多数の参加者に恵まれ盛会でした。(敬称略)

【講演者】山本孝文(日本大学) 【演題】考古学からみた韓半島の先史と古代 【要旨】古代韓半島はどのような歴史たどったか考古資料から探る。(稲作・金属・馬・漢字・仏教・法制) 先史・古代の歴史の流れを概観し、時代区分などを分かり易く述べたい。

【講演者】石井好 【演題】天照大御神は卑弥呼である 【要旨】アマテラスが卑弥呼であることは多くの研究者が指摘するところです。伊都国平原1号墳の8km以内の神社にアマテラスが祭られている神社が多いことから論証します。

※石井好は会員研究発表会で好評だった発表者です。

ワーキンググループ活動報告

第1回打ち合わせを平成30年8月12日に「港区三田いきいきプラザ」で、鷲崎弘朋、石井好、白崎勝、西川修一、菊池秀夫の5名で行なった。

1. 活動方針は各リーダーにまかせる。
2. 各グループ方針

①年輪年代と科学的年代論……纏向遺跡の年代測定結果と岡山県上東遺跡をテーマに活動するが、岡山については台風の被害により活動は停滞。

②漢鏡7期の研究……石井氏と白崎氏の基本論文にベースにして議論、研究を深めていく。

③庄内式土器研究……難しい内容なので、まずは勉強会からスタート。西川修一先生に協力していただき「庄内式土器研究」のテーマの講演会を実施する。

第2回打合せは、平成30年12月1日に「港区いきいきプラザ」(集會室A)で開催予定。

ワーキンググループ主催の講演会を実施します。皆様のご参加をお待ちしております。

日時 平成30年12月24日(月) 13時半から17時
場所 港区三田いきいきプラザ(集會室A)

*JR田町駅徒歩5分・都営地下鉄徒歩3分
内容 西川修一先生(日本考古学協会会員)の講演
「庄内式土器と古墳時代開始期土器研究のあゆみ」
参加費 500円

*講演終了後は17時までワーキンググループ討論会を実施、17時以降は近くの居酒屋で忘年会を実施したいと思います。

顧問投稿 (アイウエオ順)

私の恩師⑤ 門脇 禎二さん

元沖縄大学教授 吉岐 一郎

関西・九州にのべ30年住んだ私は幸運にも独学の古代史の恩師を直に選ぶことができた。その筆頭は文献では門脇さん、考古学では森浩一さんだった。拙著『継体天皇を疑う』(2011年)には冒頭におふたりへの献辞を掲げており、参考文献には十冊をこえる著書を記し、列島7地域別文献でも複数紹介している(図書館協会選定図書)。

門脇さんは1925年、高知県のお生まれ、熊本旧制五高に進まれ、1944年卒業、軍へ。戦後、京大文学部卒業という経歴だ。青年期に中四国・九州の生活を体験された意味は大きい。その後、2007年に他界されるまで奈良に18年、京都に44年住まれたが、東西の風土をバランスよく把握されていたといえるだろう。

*

1960年代に「聖徳太子」を疑い始めていた私は門脇さんの「大化の改新・疑」に注目していた。史上三大革新とは明治政府が言い出したもので、大化・建武・明治と天皇親政を美化したものだ。京都ではまず大学院の院生がおかしいと言いつつ出た。半世紀すぎた今から思えば、院生

の疑問は至極妥当で、『日本書紀』と『隋書』との大きな食い違いや『旧唐書』の日本国の成立疑から「大和朝廷」が幻想といえるのだ。門脇さんは関西だけでなく、広範囲に取材され、岡山など現地民放の依頼を受けて吉備の調査に取り組まれた『吉備の古代史』(88年)。昔風にいえば六尺豊かな偉丈夫はまめに各地を歩かれたのだ。

*

門脇さんと3歳若い森浩一さんとの共同取材・調査は数十年にわたり続いた稀有の例といえる。さらに松本清張が着目し、79年の「古代国家の成立」シンポで画期的な成果を生んだ。井上光貞・西嶋定生・杉山二郎(美術史)ほか門脇・森のおふたりだった。2日間にわたる会議のまとめで、井上東大教授は「日本国の成立は6世紀初めに繰り下がると考えられ、磐井の乱も乱とはいえない」として学界内外を震撼させた。それまでの「定説」はヤマト朝廷の成立は三、四世紀という「定説」だったからだ(直木孝次郎・朝日新聞寄稿・シンポのまとめは平凡社出版)。だが、井上教授は程なく他界され、この新説は補強されることなく現在に至っている。

*

元号が昭和から平成に替わるころ、福岡市の有志が関西から講師を招いて数回の講演会を持った。私は司会や接待係を頼まれた。東京や関西では多忙な講師と私語を交わす機会はほとんどなかつた。その点、福岡の場合は私にとって有益だった。私は門脇さんに「関西初の大和は前期難波京とみていいですか」とか「7世紀前半でいいですか」と訊ねている。間もなく東海大福岡短大・紀要に『「梁書」倭方面五国考』(査読・東海大文学部)が掲載されたので京都の門脇さんに送った。扶桑国が実在したというもので、ほかに文身国と大漢国の位置を想定した説だった。門脇さんから葉書で受け取ったという礼状が届いたので、数年して沖繩から厚かましくも、先生の橘女子大学の大学院生に一度講義させて頂けないかとお

願した。また、細かな字で丁寧に断り状が届いた。私は恐縮して非礼を詫言った。

2004年秋、関西の巨墳と瀬戸内の山城を見ておこうと大阪に移住した私は二上山の近傍・香芝市で開かれた門脇さんの「壬申の乱を歩く」講演会を聴きに行った。

『壬申の乱』だと話にノリすぎていかんのですわ」と聴衆を笑わせながら名調子、2時間近くも熱弁を振るわれた。

終演の後に楽屋に挨拶に行こうとしたが、ファンが詰めかけていたのでやむなく遠慮した。またの機会があると思ったのだった。だが、3年後、他界され、悔やまれてならない。

列島内、くまなくよく歩き、よく話し、よく書かれた。

没後1年、弟子に当たる方ふたりの編集で『邪馬台国と地域王国』が上梓された(吉川弘文館)。三部構成で1部は百ペーJに近い「邪馬台国論 民族・国家形成史の起点」で邪馬台国の位置論では「大和説との決別」の標題で明確に述べられている。約12頁を要約すれば、邪馬台国は伊都国から1500里で狗奴国はその南とあり、熊本県菊池あたり、ヒコは「国の良民」(魏志)だとする説だ。大和は「体制と権威」を実現しているとは考えられないという。さらに前期古墳の出現過程で大和は九州に先んじているとはいえないとも。

*

右の説は関西にあつて約70年以上、研究生活を送った方の「絶筆の九州説」ということになる。この重みは70代を関西で過ごした私がひしひしと体感じた重みだ。

しかも、門脇さんは吉備・出雲・丹後、さらに日本海域を丹念に歩き、森浩一さんの協力も得て「地域総合古代史」ともいふべき広く深い研究を完成されている。「地域王国」は例えば大和では5世紀末まで「大和盆地に倭国造と葛城国造が併置されて」いた事実を指摘されている。近年、葛城国に相当する葛城山麓で豪族館跡が発掘されており、私も見学し

ている。狭い奈良盆地の南北に二つの国造を置いた意味は見逃されてはならないようだ。

本州・四国から熊本(母校・旧制五高)への海路・陸路の道は青年門脇禎二、曾遊の道だったはずだ。お話を伺いたかった悔いが今も疼く。(次回・終―原田大六さん)

前号訂正―福永光司さんラスト4行前。仏教書以下、文字通り万巻の道教書『道蔵』を読破されたことだった。

『日本書紀』における筑紫日向の地域とは

筑紫日向の初見と史料から見た場所の判断

NPO法人志賀島歴史研究会顧問 大谷 光男

『古事記』上巻によると、伊邪那美神が火の神を生んで、遂に避ります前に、伊邪那岐神との二神と共に生んだ島が十四島、神は三十五神という。さらに伊邪那岐神は未だ作り竟えない国があるので、黄泉の国に往き、「還るべし」と伊邪那美神に伝えたがすでにこの世の姿でなかつたので、逃げ還る時、伊邪那美神は「吾を辱しめ」と怒り、黄泉の軍勢を差し向けて、伊邪那岐神を追わしめた。やつのことで、伊邪那岐神はこの世との境にあつた桃の木の実の三箇を取って、黄泉の軍勢に投げ撃つと、さすがの軍勢の勢いも弱まると、今度は伊邪那美神が自ら追ってくる始末であったが、「穢き国」から脱出し「笠紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到り、穢きを禊ぎ祓ひをしたまひき」(原漢文)とある。

さて、『古事記』上巻の大八島国の生成の段に、筑紫島は四面があつて、筑紫国・豊国・肥国・熊曾国とあり、筑紫の国名は『萬葉集』に「都久紫」または「都久志」とあるので、「つくし」と訓まれている。律令制以前の地方行政の単位である県(あがた)に、筑紫筑前・筑後)では、水沼・松浦・伊親・八女・山門・上妻・岡・灘・嶺など以上の九カ所を数える。

では「筑紫の日向」とは総じて何処の地域であろうか。もちろん、神話上のことであるので、正確なことは定めがたい。初見は右に掲げた『古事記』上巻に対し、『日本書紀』神代上では(以下、原漢文)、

一書に曰く、……筑紫の日向の小戸の橘の楹原に至りて、穧ぎ除へたまふ(上、四神出生)。

『古事記』上巻の記事と比較してのとおり、殆んど同一文である。但し、一書とある理由を探る必要がある。まずは以下、書紀神代下の史料を抽出すると(国史大系本)、対照の地域は九州南部の日向である。読み下しは日本古典文学大系『日本書紀 上』(岩波書店刊)によった。

(1) 日向の襲の高千穂の峯に天降ります(下、天孫降臨)。

(2) 天津彦彦火瓊杵尊崩ましぬ。因りて筑紫の日向の可愛(ト)の山陵に葬まつる(右同)。

(3) 一書に曰く、……筑紫の日向の高千穂の楳觸の峯に到ります(右同)。

(4) 一書に曰く、……日向の楳日高千穂の峯に降ります(右同)。

(5) 一書に曰く、……日向の襲の高千穂の楳日の二上峯に到り(右同)。

(6) 一書に曰く、……日向の襲の高千穂の添山の峯と呼ぶ(右同)。

(7) 彦火火出見尊崩ましぬ。日向の高屋山上の陵に葬りまつる(下、海宮遊幸)。

(8) 彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊が西の洲の宮に崩ましぬ(下、神皇承運)。

以上の八例から日向の地を今日の地名に推定すると、(1)の「日向の襲」は鹿児島県薩摩川内市内説と、(2)の「日向の可愛」の山陵は鹿児島県薩摩川内市内説と、宮崎県延岡市内説に分かれる。(3)の「日向の高千穂」は宮崎県西臼杵郡高千穂町という。(7)の「日向の高屋山上陵」とは『陵墓要覧』に

よれば、鹿児島県始良郡溝辺村大字麓字菅の口という。(8)の「西洲」とは筑紫を指すのであろう。本文はさらに「因りて日向の吾平山上の陵に葬りまつる」とある。『陵墓要覧』には、鹿児島県肝属郡吾平町大字上名という。日向国は今日の宮崎県と鹿児島県に当るが、宣長は『古事記伝』六之巻で、「古は大隅薩摩の地までかねて日向と云る」とあり、問題の「筑紫日向小戸橘」(『古事記』には橘小戸)は書紀下の火折尊の段には「橘の小戸」とあるが、現今の地名に当る地域は見当らない。また『古事記』に「阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金折命也」とある。すなわち、阿曇連の祖神が宇都志日金折命であるという。ところが、『先代旧事本紀』天神本紀によると、阿曇連等の祖は天造日女命とある。また同書陰陽本紀によると、阿曇連の神は筑紫の斯香神という。

底津少童命、中津少童命、表津少童命、

此三神者阿曇連等齋祠筑紫斯香神。

かつ、筒男三神を齋き祠る津守氏の存在は『日本書紀』神功皇后撰政前期まで下る。筒男三神を住吉に鎮祭した時、津守連の祖である田袋見宿禰を神主としたという。

一方、阿曇連の祖の宇都志日金折命について宣長は『古事記伝』六之巻で、「日金は、式に信濃国更級郡水鉦斗壳神社、和名抄に同郡水鉦郷あり、又斗女という郷もあり、此より出たる御名なるべし、其故は、彼国に安曇郡もありて、其郡に穂高神社などもあればなり、」という。おそらくは、阿曇氏の

の団には氏名を孝謙天皇(諱阿倍)即位で安曇に替えて農耕民となり、『日本書紀』孝徳天皇白雉四年の条にみえる阿曇守(撰津国安曇江の地)に拠点を置いて、安曇氏をもって山城国(真言宗恵運の出自地であり、安祥寺の開基)から信濃国安曇郡の開拓民となったのであろう。聖武天皇は崩御して皇帝の追尊号を諡されていることに注意されたい。

前掲の書紀神代上にみえる「筑紫日向小戸橘之楹原」についても、河村秀根は『書紀集解』(天明五年(一七八五)自

序)で、左の経緯を注に記している(原漢文)。

寛延中(一七四八)一七五二)僧雲蝶ナル者有り。日向ノ小戸橘楹原ノ図ヲ持テ、余ニ遇ヒテ曰ク、曾テ行脚シテ日向国ニ至リ得ル所ナリ。其図ニ曰ク、日向小戸橘ノ楹原ハ宮崎・那賀 両郡ニ属ス。地形扇ノ如クニ、三方三里延岡道ト薩摩道ト中間ニ橘郷アリ。南ニ小戸川アリ。東ニ橘ノ郷ヲ距ツテ平沙アリ。南北三里号シテ楹原ト曰フ。

ところで、『日本書紀』をみると、この「日向国橘小戸」から出現する神は、筒男三神が四回(神代上・生誕。神功撰政前庚辰年三月。同年十二月。神功元年二月)、少童三神の記述は(神代上・生誕)の一回にすぎない。仲哀天皇二年三月、熊襲を伐つため、天皇は皇后を伴ない、紀伊国徳勒津より筑紫にむかい、同八年正月に難県に到着、同年九月に皇后から神託があつて、新羅を討てば必ず熊襲は帰服するという。天皇は皇后の神託を疑い、突如同九年二月に天皇は極日宮で崩御する。

皇后は撰政となり翌三月に中臣烏賊津使主を呼んで審神者(神の言葉を承る人)として選んだところ、神の託宣で「日向国の橘の小戸の水底に居ながらの三筒男神の出現となった」、新羅への討伐、熊襲を服させる以外のことはなく、三神は皇后に協力することであった。皇后は早速、筑紫の北に新羅の存在を確認するため、磯鹿(志賀島)の海人をして探索させたところ「国有り」との報告で、同十月に和珥津(不明・筑紫とすれば宗像か)から皇后勝利を挙げて、荒魂の筒男三神と共に穴門山田邑(山口県豊浦郡)に凱旋する。そこで、穴門の津守連の祖である田袋見宿禰をして、荒魂三神を祭る。

ついで翌年の撰政元年二月に皇后は豊浦宮に移り、仲哀天皇の喪を収めて、再び海路により京に向う『古事記』には倭とある。この間、応神天皇の誕生あり。帰路の途中であるか、和魂の筒男三神の希望によって大津の津中倉の長峽に鎮座させる。今日の住吉大社の地(大阪市住吉区)という。住吉大

社もまた田袋見宿禰の子孫である津守氏が祭っている。

神功皇后が審神者によって召いた筒男三神も九州南部の日向であろう。皇后が新羅を討つとき、天平三年「住吉大社神代記」には、「志賀社、(警)新羅時、御船挾抄」とあり、内容は筑紫の志賀の阿曇氏の者達が、皇后の船を守護したということであろうが、少童三神の行動は筒男三神より劣るようを感じる。少童三神の活躍が詳しくあれば、このテーマを裏証できたであろうと信じている。愚生が本研究で最も望んでいる史料は阿曇氏の系図書である。発見を期待している。先は『先代旧事本紀』天神本紀にみえる「阿曇連等の祖という天造、日女命」を祀る神社を調査し、その報告は次回とする。

(丁)

「倭国大乱」と唐古・鍵遺跡

(公) 大平正芳記念財団 大平 裕

今年の初秋、久しぶりに唐古・鍵遺跡を訪ねてみました。二、三年前に訪れた時とは違い、今年になって遺跡の周辺が「唐古・鍵遺跡史跡公園」として整備され、道路を挟んで「道の駅」が開業、それを目当てに訪れる人で、休日は混雑しているそうです。それはともかく、大和盆地の中央に位置するのが唐古・鍵遺跡です。この遺跡は、吉野ヶ里(佐賀県)、池上曾根(大阪府)を凌駕する日本一の環濠集落で、縄文時代から連綿と時代を刻み、弥生時代全期を生きたのが、出土した土器や建物跡から、いわゆる大倭国の首都であった可能性が大であると筆者は考えています。その国は西暦一〇七七年には、後漢の安帝の時に、倭国王帥(すし)升らが、生口一六〇人を献上していますが、七、八〇年後の後漢末に治世に乱れを見せ、いわゆる「大乱」をむかえてしまうのです。その終わりに、近くの清水風遺跡へのがれ、前王朝に関連のある一女子を立て、新天地・古墳時代の幕開けとなる纏(むす)向遺跡に移動したと考えられます。

この唐古・鍵遺跡は、大和(奈良県)盆地の真中、それも河内(難波・住吉)から三〇キロメートル程の距離に位置しています。かつては弥生時代の人々(渡来人)が水のある、平らなこの地を目指してやって来たのでした。この盆地には、弥生時代の遺跡が六〇〇カ所、その内中核となる環濠などを伴った拠点が二〇カ所以上あったということです。BC九〇〇年〜BC二、〇〇〇年、すでに河内平野は水田での耕作を進め、やや遅れてやって来た渡来人たちは、生駒山系を望みながら大和川沿いに新天地、唐古・鍵を目指したのでした。ここで改めてこの地域の政治・経済も含めた重要性、全国の遺跡群を圧倒していることなどを記してみよう。

まず、すでに述べましたように、唐古・鍵遺跡は、卓越した地理・地勢上の最高の適地に存在しているうえに、自然の農業用水に加え、大和川の本・支流を使うことによる河内(難波・住吉)と経済の一体性の確保に成功していることです。

また、この遺跡からは、複数の様子が描かれた絵画土器が出土したことで有名ですが、出土した絵画土器は一、二点ではなく、日本で出土した絵画土器の九〇パーセントがこの地で出土しているのです。そのおびただしい絵画土器からは、当時唐古・鍵に実在した二、三階建ての楼閣の存在が目につかれます。現在二階建ての楼閣らしき建物が唐古池の畔(ほとり)に復元されていて、公園の中ではひととき目をひきますが、筆者にとっては、芸術性に乏しく、もう少しなんとかならなかったのかと、残念でなりません。これらの絵画土器は、大陸の技術者が渡来して来たこと、そして少なくとも唐古より楽浪郡に向いて、同地での多層楼閣を実際に見てきた人が複数存在していたことを物語っています。

最も重要なのは、唐古・鍵遺跡が縄文末期から弥生時代全期に生き延び、その文化を古墳時代に引き継いでいるらしい

ということ。そして既に、吉備からは特殊器台・大壺、伊勢地方からは各種の土器がこの唐古・鍵の地に集まってきたこと。これと同じことは、すぐ隣の纏向遺跡(こちらは古墳時代の幕開けとなった遺跡ですが)にも言えます。東海(伊勢・尾張)を中心に、各地からの土器が集まっています。これは、二つの遺跡が縁続きであることを示しています。極端かもしれませんが、筆者は、「倭国大乱」で弱体化した邪馬台国の残存勢力が纏向の地に移転し、新しい邪馬台国をつくったのではないかと考えています。事実、唐古・鍵遺跡に近い清水風遺跡からは、邪馬台国で唯一の前漢鏡の破片が見つっていますが、弥生の最末期、唐古・鍵遺跡を出た人々が、清水風遺跡または纏向に移っているという痕跡があるということも裏付けてくれています。

このあたりが日本の古代史の最大の謎の一つでありますから、そろそろ本格的に遺跡を個別ではなく、横断的(年代的、地域的)な研究が早急に求められるところです。まして、前漢のはるか昔、秦の始皇帝の前代にあたる燕国の鏡である多鈕細文鏡がこの地の近く、大阪府柏原市大泉と奈良県御所市名柄から出土しています。これらの遺跡は、多鈕細文鏡が出土している日本最古の王墓といわれる福岡県の吉武高木遺跡(多鈕細文鏡出土)とは、少なくとも同じ時代の遺跡であることに間違いはありません。

多鈕細文鏡の命名に関して、松本清張は、短編小説「断碑」の中で、「彼の『多鈕細文鏡研究』はその結果の発表である。多鈕細文鏡などという名前も彼が命名したのである。それまでは学界では、「細鈕鋸歯文鏡」といっていた。名称を創作することも彼の反逆であった。」と、記しています。文中の彼とは、この地で発掘、調査研究に情熱を燃やし、三四歳という若さで、結核で病死した森本六爾のことです。この小説では、森本の考古学に賭ける凄まじい思いと、考古学界との軋轢(けんりく)を見事に描いています。

森本は、この唐古池で採集した土器の底に靫の跡を発見、それによって、弥生時代に稲作農耕が行われていたことを主張したのですが、在野の研究ということで当時の学界では受け入れられませんでした。彼の功績は、これらの研究のほか、雑誌「考古学」を発刊、それに寄稿した仲間との交流を通じて、後世、多くの研究者を世に送り出したことです。藤森栄一、杉原莊介、岩宿遺跡の発見者相沢忠洋ら、著名な考古学者たちが名を連ねています。死後、『日本農耕文化の起源』などの著作が刊行されています。

横道にそれてしまいましたので、本題に戻ります。次に、唐古・鍵遺跡の中心と考えられる大型建物(神殿・宮殿)についてですが、この大型建物について、藤田三郎著『唐古・鍵遺跡 奈良盆地の弥生大環濠集落』(同成社)には、「西地区において注目される遺構は、弥生時代で最も古い『総柱』の大型建物跡である。この建物は南端の一部が調査区外のため、その全容は明らかにできないが、梁行二間(七メートル)、桁行五間以上(二・四メートル以上)の南北に長い建物で、建物の妻の外側に独立棟持柱を持つ構造になっており、検出されている規模で床面積は約八〇平方メートル、畳にすれば約四八畳もある。柱列が東側・中央・西側の三列あり、この中央の柱列、すなわち床下にも柱列をもつことが『総柱』建物の特徴である。」と、説明しています。

筆者も、残存した太い柱を見ますと、円形には削られてなく、節が目立っていて、しかも直体ともいえず、逆にそれが次の池上曾根遺跡の大型建物(B・C五二年)よりさらに古い建物ではなかったかと、考えられました。事実、今回訪れた時には、「二二〇〇年前に立っていた大型建物跡」と、案内板には記されていました。

重ねて強調したいのは、唐古・鍵遺跡は、①縄文より弥生前期を生きた日本一の大環濠集落であること、②奈良盆地の大和川全域の要にあり、河内とは指呼の関係にある要衝の地、

③纏向遺跡の原型とも考えられること、④いうまでもなく、河内とは一体であり、東海、近江經由北陸、山城から但馬と唐古・鍵遺跡の後背地は膨大なもので、全国統一の要となる地にふさわしいこと、などが挙げられます。

『後漢書倭伝』には、倭について、

倭は、韓の東南方の大海の中にあつて、「人々は」山の多い島に居住しており、すべてで百余国(「になる」)。「前漢の」武帝(在位前一四一―前八七年)が「衛氏」朝鮮(王朝)を滅ぼした(前一〇八)後、通訳を連れた使者を漢に通わせた国は、「そのうち」三十ばかりである。「それらの」国(の首長)はみな王と称して、代々その系統を伝えてゐる。「それら諸王の王である」大倭王は邪馬壹国に居住している。

と、日本列島各国王の上に位する大倭王の存在を伝えています。そして、『魏志倭人伝』には、「邪馬壹」国は、もと男子が王であった。ところが七、八十年前に倭は乱れ、国々は長年の間互いに攻撃し合っていた。そこで「国々は」相談の結果、一人の女子を立てて王とした。「彼女は」名を卑弥呼といい、鬼道に仕え(「その靈力で」)能く人心を惑わしている。」とあります。卑弥呼が共立された邪馬台の地にはかつて男王がいて、王統は七、八〇年続いたが、倭国は乱れ、長年にわたって互いに攻撃し合っていたということになりました。「倭国大乱」です。「倭国大乱」で収束のつかなかった邪馬台の地に一人の女性「卑弥呼」が共立されることになりました。この女性は、少なくとも大倭王政権の遠縁か、唐古・鍵の地で名を高めた巫女の長であったかと考えられます。

筆者が二二〇〇年来主張しているのが、卑弥呼は「日御子」「日巫女」で、『日本書紀』『古事記』が伝える天照大神なのです。素性がいい加減では、国の統治は出来ません。ましてや、これより卑弥呼(天照大神)には、中国平定(出雲征討)、

天孫降臨(中西部九州・狗奴国平定)がまつているのです。石野博信著『邪馬台国の候補地 纏向遺跡』(新泉社)は、九州へのヤマト・カワチ系の土器の進出について、次のように記しています。

奴国の福岡市西新町遺跡や伊都国の前原市三雲遺跡群の地域にヤマト・カワチの庄内式土器を出す遺跡が五〇遺跡あまりある。特に博多湾に面する西新町遺跡には、ヤマト・カワチ系の土器をもつ住居群が一つのグループを作って存在し、朝鮮系の土器をもつグループとも共存し、となりの伊都国も同様なことから邪馬台の北九州諸国の実質的な支配の強化が窺われます

筆者は、これらの事実を土器(庄内・纏向)から算出して、三世紀初頭(二二〇〜二三〇年)と考え、一「倭国大乱」「卑弥呼共立」から、やや時間が経過しています。

唐古・鍵遺跡を訪ねたついでに、奈良盆地の南西に位置する纏向遺跡へも回ってみました。環濠を持たない開かれた宮都が建設された地で、今年の春には居館城の発掘調査が終了、居館三棟の柱がそれぞれ復元されていました。この地こそ、筆者が卑弥呼の居館があった場所ではないかと考える場所です。

最後に、いわゆる、卑弥呼の墓と有力視されている「箸墓」に参拝、天照大神(大日靈貴・卑弥呼)による「邪馬台国」の建国に思いをはせたのでした。

都内最大の弥生後期の「首長墓」発掘

― 大田区田園調布南遺跡の方形周溝墓 ―

東京大学総合研究博物館研究事業協力者 小田 静夫
東京西郊に広がる武蔵野台地には、旧石器・縄文時代の遺跡が多数存在するが、弥生時代になると遺跡の立地や分布状

況に大きな変革が認められ、これは、狩猟採集社会から農耕社会に移行したことによる、生活環境の変化が起因していた。つまり、水田稲作に適した「沖積低地」に近接した場所に集落を構築したことである。

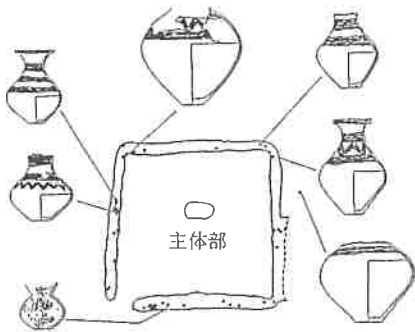
ここで紹介する田園調布南遺跡は、東京湾に注ぐ多摩川河口域の広大な沖積低地を経済基盤にした弥生後期の大規模集落である。そして発見された遺構の中に、「方形周溝墓」と呼ばれる特徴的な墳墓が存在し、その中の一基は都内最大規模を有する「首長墓」であった。

(1) 発掘調査

昭和六十二年・六十三(一九八七・八八)年、東京都大田区の都立田園調布高校内で緊急発掘調査が行われた。この場所は、多摩川下流域の左岸に面した標高十七〜十九メートルの武蔵野台地崖線部に立地している。発掘調査は、約三、〇〇〇平方メートルの校庭部分で縄文時代と弥生時代を中心にして、弥生時代では竪穴住居址三軒、方形周溝墓四基、それに配石一基、集石三基が発見された。なお方形周溝墓群は、さらに南側に分布が広がっていた。

(2) 方形周溝墓の発見

田園調布南遺跡の第一号方形周溝墓は、南北十六メートル、東西十九メートルの規模で、関東地方では三番目、都内では最大例であった。中央部には長軸三メートル、短軸一・七メートルの遺骸を埋葬した隅丸方形の主体部が存在し、玉類が発見されたが、人骨はすでに消滅していた。



第1号方形周溝墓

土壌のリン分析を行った結果、遺骸の痕跡は認められ、被葬者の頭位は東向きであった。さらに区画された四隅の周溝中には、壺形土器が多数並べられ、南側周溝北壁は真っ赤に焼けて火を焚いた状況が観察され、埋葬に際して盛大な祭祀行為が行われたことが理解された。

(3) 貴重なネックレス

主体部からは、被葬者が首に装着していた遺存状況で、十八個の玉類が発見された。内訳は青色のガラス丸玉八、水晶切子玉三、白色カオリン管玉二、赤色の鉄石英管玉三、黄緑色の壁玉管玉二個であった。ちなみに玉類の産地は、ガラス玉は畿内、水晶は甲武、カオリン、碧玉は相模、鉄石英は佐渡地方である。つまり、こうした遠隔地で製作された貴石玉類を入手し身に付けられるほどの有力首長の墓であった。ちなみに、都内の方形周溝墓例では、主体部に僅か数点の玉類の出土が知られる程度であり、この多数の貴石玉製品を色彩豊かにちりばめた美しいネックレスは、この被葬者の権力の大きさと地位の高さを示すものであった。



首長の貴石ネックレス

(4) 久ヶ原遺跡との関連は

田園調布南遺跡の東南部には、南関東弥生後期の「久ヶ原式土器」の標式遺跡として知られる大田区久ヶ原遺跡が存在している。約十一万平方メートルの範囲に一、〇〇〇軒以上の竪穴住居を有する巨大集落で、台地下には水田稲作に適した肥沃な多摩川河口部の沖積低地が広がっている。また久ヶ原集落の首長墓は確認されていないが、この隣接した田園調布南第一号方形周溝墓の被葬者との関連を考える必要がある。

(5) 大和政権の前線基地

この被葬者が、この地方の弥生後期の小国家群とも呼べる久ヶ原集落を統率していた有力首長(大王)であったとすれば、次の古墳時代に大和政権の覇者の大型古墳である「前方後円墳」が、この多摩川河口部兩岸の台地(大田区田園調布古墳群)と丘陵部(川崎市日吉瀬古墳群)に構築されていることも理解できる。つまり、新しく海を渡って進出してきた大和政権の首長たちは、東京湾を北上する行程で田園調布南の首長たちと支配権をめぐる交替劇を演じた結果、この地域を大和勢力下に置いた事実を物語っている。

弥生時代後期といえば、北九州、近畿地方に小国家が誕生し、それらを統合した「邪馬台国」の存在が中国の史書に登場する時代である。邪馬台国の所在地には諸説があるが、西日本地域ではこの頃、有力首長を中心にした大規模な弥生集落が各所に誕生した時期でもある。東日本地域でも少し遅れて小国家的な弥生集落が、東京湾沿岸や多摩川上流部の丘陵地帯に形成され、のちに大和政権の前線基地として組み込まれた歴史がある。

この田園調布南遺跡と久ヶ原遺跡は、その内容から「邪馬台国」の規模には及ばないが、大和朝廷の東日本への東征で、東京地方で初めて注目した「小国家的集落」の集合地と考えることも可能である。

明石海峡とヤマト建国、淡路島と邪馬台国の話

歴史作家 関裕二

淡路島から弥生時代後期の大きな鉄器工房がみつかった。五斗長垣内「こさかいと」(淡路市黒谷)遺跡と舟木遺跡(淡路市舟木)だ。五斗長垣内遺跡は弥生時代後期の一世紀ごろから百年続いた鍛冶工房で、竪穴建物跡が二三棟が出土し、そのうち鉄器工房は一二棟。鉄器一三〇がみつかった。舟木遺跡は弥生時代後期の二世紀半ばから三世紀初めにかけての「まさに邪馬台国の時代」の鉄器工房あつた。約四〇ヘクタールという広大な土地に、四棟の竪穴建物跡があり、ひとつの建物の床面に、焼けたあとがみつかった。鉄器と鉄

片約六〇点が出土した。

大阪から目と鼻の先の淡路島から鉄器工房がみつかったことで、邪馬台国畿内論者は、小躍りして喜んでいる。鉄器の過疎地帯と見なされていたヤマトの周辺にも、鉄は存在したのであり、邪馬台国畿内説の証拠になる、というわけだ。

しかし、邪馬台国論争は、一筋縄ではいかない。淡路島は、ヤマトに鉄を流していなかったと思う。それはなぜか……。

平成二十七年(二〇一五)に淡路島からみつかったいる銅鐸が、出雲の加茂岩倉遺跡(島根県雲南市加茂町)や荒神谷遺跡(島根県出雲市斐川町)の銅鐸と、兄弟関係にあった。弥生時代後期の淡路島が手を組んだのはヤマトではなく、出雲だった。そしてその出雲は、北部九州と結ばれていた。

ヤマト建国の直前、ヤマトの発展を恐れた北部九州沿岸部の首長たちは、出雲と手を組み、鉄の流通を堰き止めたとする有力な説がある。出雲は吉備にも協力を求め、関門海峡は封鎖されたという。この考えは、考古学の指摘とも、よく合致する。

筆者は先日淡路島の対岸、兵庫県の明石市を旅して、「関門海峡だけではなく、明石海峡でも通せんぼがあったな」と感じた。出雲勢力は淡路島を抱き込み、明石海峡を閉じ、その見返りに、淡路島に鉄を流したのだらうと、推理した。根拠はいくつもある。

明石市の稲爪「いなづめ」神社には、興味深い伝承が残されている。推古天皇の時代、異国の大将(黒牛に乗った鉄人)が、日本を乗っ取るうと考え、八千の兵を率いて九州に押し寄せた。勅命を承けた伊予の小千益躬「おちのますみ」(物部系)は、策を用い、降服してみせ、水先案内人を買って出た。そうして明石まで異国の大将を案内し、ここで、三嶋大明神の加勢を受け、一気に敵を殲滅したという。良く似た話は、『予章記』や『八幡愚童記』にも載る。

穏やかに見える瀬戸内海だが、多島海が作り上げた海底の

地形は、複雑で速い潮流を生み出した。よそ者が船を漕ぎ出せば、波に吞まれて海の藻屑と消えることもしばしばだった。だから水先案内人が必要なのであり、また、海賊が跋扈する理由も、ここにあった。「穏やかに見える魔の海」に誘い込み、狭い海峡で塞ぎ、挟み撃ちにすれば、いかに大軍を擁していても、勝ち目はなかったらう。しかも、陸に上がっても、明石城周辺の地形は峻険で、東に進むこともできない。明石海峡は、海の関所の機能を果たしていたわけで、いわゆる「畿内」が、「明石海峡から東側」だった意味も、これよく分かる。

ところで、『播磨国風土記』には、不可解な記事が残されている。播磨の瀬戸内海沿岸部(明石海峡の西側)で、出雲神と新羅王子・アメノヒボコが、土地をめぐる争ったといっている。奇妙なのは、アメノヒボコが第十代崇神天皇を慕って来日していたことで、ヤマト建国直後の「生きた人間」だったこと、それが、播磨で神話の神と争っていたのは、時代が合わない。

しかしここに、大きなヒントが隠されている。『播磨国風土記』は、朝廷に提出する前の原本がたまたま残ったものだ。『日本書紀』とすりあわせをする前の「説話の原型」だから、出雲神とアメノヒボコが、出逢ってしまったのだ。提出された原本を見て朝廷側は「ここを修正しないと正史(日本書紀)と辻褄があわなくなる」難癖をつけ、播磨の役人も手直ししたかもしれない。しかし、「赤字を入れる前の話の元」が残っていたわけで、この話を「神話と歴史がごちゃ混ぜになっているから信頼できない」と切り捨てることは、大切な証言を無視することになる。

で、何が言いたいかというと、第十代崇神天皇は実在の初代王と目されている。播磨で勃発していた争いは、ヤマトの黎明期と考えられること、出雲神がなぜ播磨に固執したのかと言え、明石海峡の利権を手放したくなかったからだろう。

そして、アメノヒボコはこのあと日本海側の但馬の出石(豊岡市)に移り出雲を牽制するようになるが(但馬は出雲系の埋葬文化を拒否している)、アメノヒボコの勢いに押された出雲が明石海峡封鎖を断念したことによって、ヤマトは一気に成長し、北部九州を圧倒するようになったのではないかと……。

このあたりの詳しい話は、拙著『始まりの国』淡路と「陰の王国」大阪(新潮文庫)の中で述べてある。

近年話題の邪馬台国研究

大阪府立狭山池博物館学芸員 西川 寿勝

はじめに(台与は早世か長寿か)

近年話題の邪馬台国研究をいくつかお話しします。

二〇一八年五月に纏向遺跡の大型建物のわきから発見された桃の種による放射性炭素年代の測定値が公表されました。著墓古墳出土の布留〇式土器の前段階にあたる庄内3式土器をともしう土坑が、一三五〜二三〇年の間という、かなり幅をもたせた解釈となりました。やはり、放射性炭素年代法からは、限定的な年代を導くことは恣意的になりかねないのかもしれない。

ところで、著墓古墳を長寿だった卑弥呼の大家と仮定する説に対し、問題点が指摘されています。卑弥呼の継承者として描かれる台与の寿命についての議論です。『魏志』倭人伝には台与は二三歳で女王となったと記されます。おおよそ二五〇年前後でしょう。そうすると、台与の治世が長く続けば世代交代は三〇〇年頃となり、著墓古墳に続く大王墓の造営は四世紀にしたいくなります。しかしながら、オオヤマトには著墓古墳に続いて陸統と大王墓が造営されます。このうち、著墓古墳・西殿塚古墳・茶白山古墳からは二重口縁壺が発見されており、そこに新旧を認めるとしても、形態や技法は酷似し、同世代の製作ではないかというのです。わたしもそう思います。つまり、三基の大王墓の被葬者も同世代だと。そ

うすると、卑弥呼の大家を箸墓古墳とした場合、台与の早世を推定せざるをえません。

これに対し、『日本書紀』には箸墓古墳がヤマトトトヒモモソ姫の墓と記され、それは崇神天皇と同世代の人です。崇神天皇の陵墓は箸墓古墳の近くにある行燈山古墳と推定されるのですが、出土した円筒埴輪や埴形などから箸墓古墳の被葬者と同世代とは考えにくく、これも悩みどころです。

1 公孫氏の東夷支配と鏡

次に、史料研究からの最近の話題を紹介します。

ひとつは公孫氏勢力の東夷支配をどうとらえるかという研究です。魏は朝鮮半島北部から遼東半島にあった公孫氏勢力を景初二年(二三八八)に滅ぼし、楽浪郡と帯方郡を自身の領域にします。その結果、卑弥呼の朝貢が可能となり、景初三年(二三九九年)十二月に遣使が魏の洛陽で皇帝に謁見するのです。

公孫氏勢力とは、黄巾の乱(一八四年)後に、公孫度(こうそんたく)が遼東郡の太守(郡の長官)に任命されたことにはじまります。ところが、黄巾の乱後の後漢王朝は混乱を極め、軍団をもつ董卓・袁紹・曹操などが洛陽周辺と華北地域を平定することで、かろうじて名目を保つにすぎない状態でした。しかし、中国では長年帝国を支配できるのは天子である劉氏一族だけという思想が定着しており、軍団を持つ諸将のうち、誰が皇帝を庇護して権力を握るかをめぐって抗争が続くのです。

『三国志』から公孫氏勢力の動きをみると、独立した支配者に描かれています。後漢帝国の弱体化に乗じて領土的野心をあらわにし、東方は高句麗、西方は烏丸(うがん)に侵攻します。また、遼東郡を分割して遼西に太守を任命したり、楽浪郡を分割して帯方郡をつくり、行政機能を拡大します。さらに、山東半島の東萊郡に進出して諸県を統治します。このとき、公孫度は自らを遼東侯・平州牧と名乗りました。以

上は、後漢や魏から命令されて、軍事や行政を執行したのではなく、公孫氏勢力が独自の軍閥的な地方独立政権とみられがちでした。

これに対し、公孫氏勢力の行動は、後漢や魏から一定程度容認された絶域に対する辺境支配権によるもので、公的性格が強いという反論が示されています(二)。公孫氏とは遼東郡太守の官職をもつ役人に過ぎず、郡域外へ派兵する根拠や権限をもっていないし、領域の内外で独自の支配組織をつくらせて君臨する根拠や権限ももっていないというのです。

確かに、裴松之(はいしようし)の注釈による『魏書』『魏略』などには、公孫氏一族の行動が逐一、後漢や魏の忠誠と容認に基づくことを申し開いた上表文があり、地方独立政権を疑うことができます。『三国志』公孫度伝による公孫氏勢力の独断は、魏が公孫氏を滅ぼす正当性を示した性格もあり、注意が必要です。とはいっても、『魏書』『魏略』などにある公孫淵の申し開きの上表文も、命請いのために魏王朝にこびた文面で占められ、信びよう性の検討が必要です。たとえば、『魏書』の上表文は公孫度による統治がなければ、郡はとつくと廃墟と化し、住民は蛮王の支配下におかれていたであろうと、領域外への派兵を正当化します。一方で、海北(遼東郡)の土地は切り離して君(公孫度)にあずけ、子々孫々にわたって支配する権利を魏の曹操から命じられたと、独立性を正当化しているのです。

いずれにせよ、卑弥呼の朝貢直前までにあった公孫氏勢力の東夷支配の根拠や目的が多方面から検討され、公孫氏勢力の構想が、正当性の根拠を後漢皇帝に委ねながら、支配地域では実質的に皇帝として振る舞おうとしたもので、結果的には滅亡する直前まで中央から容認されていたのではないかと分析されたのです(二)。

さて、『魏志』韓伝には、魏が楽浪郡と帯方郡を攻めた後、明帝は帯方郡太守と楽浪郡太守を派遣して二郡を治めさせ、

諸韓国の臣智に邑君(ゆうくん)・邑長(ゆうちやう)の印綬を下賜(かし)した、とあります。その結果、帯方郡に朝見するときに官服や印綬をつけたものが千人以上にのぼったというのです。

当時の印綬は文書業務や封泥(ふうでい)などに使うものですが、東夷にとってそれが必要な相手は帯方郡との交渉に限られていたと推測できます。そのような印綬をもって携行していた人々が諸韓国内千人以上いたということは、楽浪郡や帯方郡に行く時は官印が必要ということがすでに韓では常識化していたようなのです。

すなわち、帯方郡から官印をもらって携行することが中国文物を交易するためには不可欠であり、東夷で大きな意味をもっていたと推測するのです。ただし、後漢王朝の統治が健全だった時代に、印綬の乱発や携行を特記した記事はみられません。そうすると、印綬の乱発は公孫氏勢力が帯方郡を設置した建安年中(一九六〜二〇〇年・二〇五年頃か)に遡り、それを引き継いで景初年中(二三八〜二三九年)に魏から派遣された帯方太守も印綬を乱発したのだろうと推測できるのです。公孫氏による印綬の乱発は独自の政策であったものの、後漢や魏の名義を借りた印綬だったため、公孫氏の滅亡後は魏によつて政策が引き継がれたようなのです(三)。

このような研究成果を評価すれば、倭国に流入した中国文物、なかでも舶載鏡の分布の変化との対応関係が注目されます。舶載鏡は岡村秀典氏の漢鏡七期区分のうち、5・6期は明らかに北部九州に偏在分布がみられることが知られます(四)。大半が伊都国領域での出土です。

対して、7期1段階の半肉彫獣帯鏡などの分布は西高東低ですが明快でなくなり、すでに近畿が中心であるという説、まだ九州が中心であるという説にわかれます。そして、7期2段階の画紋帯神獸鏡の分布は近畿が中心にみえます。この西高東低の超越に公孫氏勢力の銅鏡差配が始まったという説

もありませんが、わたしは帯方郡設置による入手者の限定が原因と考えます。そして、7期2段階にある画紋帯神獸鏡についても、北部九州でよくみられる破鏡にされたものが奈良県ホケノ山墳墓出土鏡や大阪府池島遺跡出土鏡にみられることから、鏡種の変化と入手者の限定時期は対応していないと考えます。

ちなみに、7期3段階は三角縁神獸鏡に代表され、これを卑弥呼の下賜鏡「銅鏡百枚」にはじまる鏡群とする説にしたがえば、限定された入手者とは近畿を拠点にする邪馬台国連合の女王卑弥呼であることは明白です。

そうすると、漢鏡5期・6期の段階では、楽浪郡に詣でさえすれば、交易によって舶載鏡を手に入れることが可能だった時代です。その後、公孫淵による官印携行と、帯方郡設置による交易門戸の制限により、楽浪郡まで到達して鏡を手に入れる者が次第に淘汰されていった時代となります。それが漢鏡7期の1・2段階の分布に示されていると思うのです。連合体形成による交流です。

その後、楽浪郡・帯方郡は魏の領域になり、帯方郡から認められた印綬の保持者はさらに限定され、それが漢鏡7期3段階の鏡の分布を如実に示すと考えます。邪馬台国による中国文物の独占的入手が完成されたように思えます。

2 弥生の硯と文字資料

現在、島根県田和山遺跡・福岡県筑前町栗師ノ上遺跡と東小田遺跡・福岡市比恵遺跡(奴国)・糸島市井原遺跡番上地区(伊都国)で発見された弥生の硯が注目されています(五)。先に示した帯方郡の意義を検討する資料として大変重要と確信します。弥生の硯を通して、楽浪郡・帯方郡との交渉で必要とされた印綬や文字がどのような広がりを見せるのか、注目されるのです。

さらに、今年になって長崎県カラカミ遺跡から弥生時代後期中ごろの土器とともに楽浪系の瓦質土器の鉢が発見された

と公表されました(六)。この土器はこれまで老岐島で見つかった半島北部にみられる瓦質土器の鉢と形態がやや異なり、銅器模倣が明瞭で、遼東半島で作成されたものと推定されま

3 正始年間以降の倭国

もうひとつ、史料研究で注目されている話題を紹介します。『魏志』倭人伝は卑弥呼が死んで、台与が立つところまでは詳しく記します。先ほど示したように二五〇年頃までです。ところが、それ以降については狗奴国との交戦の行方や、金印や黄幢はどうなったのかを記しません。台与と魏の外交もわかりません。それまでは、狗奴国交戦を訴えた卑弥呼のもとに帯方郡から派遣された張政らが滞在していました。ところが、台与の遣使とともに去ったのです。それで、その後の状況が記述できなくなったと理解されがちでした。

その後の朝貢については、二六五年になって魏が滅亡し、晋になったことで『晋書』の中に記載があります。この朝貢は『晋書』起居注を引用した『日本書紀』にも記されています。二六六年のことです。

そうすると、二五〇年代から二六六年までの外交や倭国の情報は何もなかったのか、ということですね。ところが、『晋書』倭人伝は文帝(司馬昭)が魏の相国(宰相)になる二五八年以降に数回やってきた、と記します。遣使は絶えなかったとも記しています。

これについて、最近の学説として、『三国志』の東夷伝を著した陳寿の編さん方針で二五〇年以降についてはわざと記事を割愛したのではないかと提案されています。これは高句麗伝や扶余伝など、東夷伝全てに同様の方針で、朝貢記事が欠落しているという分析です(七)。卑弥呼の遣使が謁見した

少帝以降、魏の実質的な政治は皇帝から切り離されています。少帝(齊王)は八歳で即位して卑弥呼の遣使に会い、二三歳で廃位されています。その後も一二歳の高貴郡公がたつものの一九歳で亡くなり、最後の陳留王も一四歳で即位して一九歳で退位し、魏は終わります。いずれも皇帝の名で示されず、二五〇年代以降は皇帝を補佐した司馬氏による政治・外交・戦争で魏が成り立っており、この時代の司馬氏の活躍は『晋書』に譲ろうという方針だったというのです。

ただし、この問題は『魏志』本紀と東夷伝の不統一を含め、陳寿の編さん方針ではなく、東夷伝の原史料の追求に発展させて考えることができると考えられます。

- (一) 仁藤敦史(二〇〇九)「卑弥呼の王権と朝貢」『国立歴史民俗博物館研究報告』一五一 国立歴史民俗博物館
- (二) 三浦啓伯(二〇一八)「公孫氏政府による東夷支配の正統論的根拠」『古代史の海』九〇 古代史の海の会
- (三) 同(二)
- (四) 岡村秀典(一九九九)『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館

烏桓・鮮卑・東夷伝	記事の最末年(西暦)	他文献によるそれ以降の記事
烏桓(うがん)	建安11年(206)	景初元年(237)『魏略』
鮮卑(せんび)	青龍3年(235)	
扶余(ふよ)	正始年間(240~249)	
高句麗(こうくり)	正始5年(244)	正始6年(245)『魏志』滅伝
東沃沮(ひがしよそ)	推定正始5年(245)	
挾婁(ゆうろう)	黄初年間(220~226)	景元3年(262)『魏志』本紀
滅(わい)	正始6年(245)	景元2年(261)『魏志』本紀
韓(かん)	正始7年(246)ころ	景元2年(261)『魏志』本紀
倭(倭人伝)	正始8年(247)ころ	司馬昭が相国だったとき数回朝貢(258~)『晋書』倭人伝

『魏志』東夷伝諸国の記事の年限(陳寿はわざと250年以降を割愛した?)

(五) 糸島市教育委員会(二〇一八)『伊都国人と文字』 第四回伊都国フォーラム

(六) 宍岐市教育委員会(二〇一八)『カラカミ遺跡6次における「周」文字練刻瓦質土器について』記者発表資料

(七) 河内春人(二〇一七)『晋書』に見る魏と倭の関係』『ヒストリア』第三三三号 大阪歴史学会

蘇我氏と龍泉寺関係文書

日本家系図学会会長 宝賀 寿男

はじめに―問題意識の説明

大化前代で最大の豪族、蘇我氏については、多くの研究者に取り上げられ、関係する著作も多い。そのなかで、大きな謎とされるのが、その出自、祖系の問題である。

かつては、百済の木苜滿致が日本列島に渡来してきて、蘇我氏の祖・滿智になったとみる門脇禎二氏の説も取り上げられ、学究にも賛同者が見られたが、こんな荒唐無稽な説は現在では殆ど支持者がいない。とはいえ、韓地からの渡来説の火は消えないものらしく、最近でも、飛鳥の考古遺跡・遺物などから百済の領域から渡来してきたのが蘇我氏の祖先だという説がまた唱えられる。こうした古代氏族の出自について、文献史料や考古学、祭祀・習俗など多面的総合的に検討して考えねばならないことは、言うまでもない。

蘇我氏本宗は乙巳の変で滅びたが、蝦夷大臣の兄弟の蘇我倉麻呂(雄正子)の蘇我倉家の流れがその後も続いて、奈良時代には石川朝臣氏となって納言や参議という議政官を輩出し、九世紀後葉、元慶元年(八七七)には宗岳朝臣を賜姓した。それが、十一世紀頃から宗岡朝臣と表記されることが多くなり、江戸期の下級官人にまで長く続いた。こうした長期間の蘇我氏一族の動向を追うなか、蘇我氏の出自については、

多くの論究にかかわらず、依然として諸説が入り乱れたまま来ている。

記紀などの史料について、六世紀中頃から活動する宣化・欽明朝の大臣蘇我稲目から後しか蘇我氏の活動実績を受け入れず、それ以前の記事は簡単に切り捨てる津田博士流の戦後史学の悪影響を受けたまま、よく分からないままこの問題が放置されてきた。

このため、氏の名の由来が大和国高市郡曾我(奈良県の橿原市曾我町あたり)にあったとしても、その先の起源の地について、主なところでは、①河内国の石川郡とみる説(大阪府南部の石川流域、南河内郡河南町一須賀あたりか)、②応神王統における大族葛城氏の流れとみて、大和の葛城郡とみる説、③氏の名と同様に高市郡曾我がそのまま本源だとみる説、という見方に大別される。そして、大和国高市郡曾我と河内国石川郡との関係についても、前者から後者への移遷と考えるもの、その逆と考えるものがある。

蘇我氏の祖系探究にあたって河内国石川郡の位置づけが重要だということのだが、これに関する重要文献が大阪府富田林市にある龍泉寺に關係する文書である。

石川郡の龍泉寺関係文書

龍泉寺は、真言宗の寺院で、嶽山の東中腹に位置しており、蘇我氏先祖の宗我大臣(馬子)が推古朝に建立したとの伝承がある。この伝承と平安前期・中期の宗岡朝臣氏の動向や財政基盤等が記されることで著名なのが、龍泉寺に關係する文書である。

この文書は、奈良の春日大社に一連のものとして四通残り、『平安遺文』にも収録される。四通は、承和十一年(八四四)十一月・同十二月及び寛平六年(八九四)三月で、最後の文書が平安後期の天喜五年(一〇五七)四月三日付けとなっている。

ところが、記事の内容には問題がある。すなわち、最初の三通は年代記事に疑問が残り、明らかに偽造文書とされよう。

『平安遺文』に収録があるものの、学界でも信頼性に疑問ありとされる。最後の文書が正文かどうかの是非については、決め手がないということで、これまででは、最後の年代頃に四通まとめて作成されたのではないかと考えられ、この文書類を基に蘇我氏の由来についても論じられてきた。そこには、龍泉寺の氏人宗岡公明、権俗別当宗岡朝臣(欠名)及び俗別当散位宗岡公用の名が見え、河内国の石川郡に十一世紀中頃、龍泉寺を氏寺として宗岡朝臣氏が居住していたという把握である。

当該文書類のはじめの三通の内容が疑問だというのは、平安前期の承和十一年の時点で既に一族が「宗岡朝臣」姓で見えることであり、上記のようにこの賜姓は元慶元年(八七七)のことであった。しかも、当該時点では、「龍泉寺氏人公重」「氏之長者宗岡公重」という名前も疑問である。第三の寛平六年の文書においても、「承和十一年之比、氏長者宗岡公重不慮之外、為強盜被殺害」という記事があり、これも疑問だからである。

先に見たように、宗岳・宗岡(宗丘)が併用された十一世紀前半頃を経て、次第に表記が宗岡に一本化されるようになるから、十一世紀半ばの天喜五年頃の時点で一括して四文書が作成されたものともみれば、最後の文書だけは救われよう。その場合に、最後の文書だけが正しい文書だと言える保証がどこにあるのだろうか。

龍泉寺関係文書の真偽

十一世紀半ば頃の河内南部において、宗岡朝臣氏一族が龍泉寺を氏寺としてその近隣に居住していたという史料は、ほかにはまったく管見に入っていない。大和飛鳥の法興寺(飛鳥寺)を、元慶元年賜姓の宗岳朝臣木村はその氏寺として尊

重しようとした動きがあったことが、『三代実録』に見えるが、それから二世紀弱も経った時期に、河内のほうに宗岡氏一族が実際に居住して、そこに氏寺を設立、経営しえたのだろうか。

その石川郡で平安期に武家化した石川朝臣氏の系図が早稲田大学図書館にあるのを、私は知り、この内容から当該系統が河内源氏石川氏につながると具体的に認識するものだから、それとは別系統で宗岡氏一族が現実に河内にあったとは考え難い。

倉本一宏氏も、上記文書に見える馬子創建の主張にかかわらず、「七世紀にこのような山岳寺院が存在したとは考えられず、平安時代以降の氏寺であろう」と記される『蘇我氏—古代豪族の興亡』。

同寺の縁起伝承では、同寺を空海が復興させたというし、天長五年(八二二)に藤原冬緒が堂宇を再建し、淳和天皇から現寺号を賜ったと伝えるから、そこには平安前期の石川郡における石川氏の確たる存在はもちろぬ、同寺と石川氏との関係が見えず、龍泉寺が「石川氏が建立した氏寺」だと裏付けるものはない(龍泉寺を島大臣が起した旨が見える「元興寺縁起」は、鎌倉時代末期に著された『上宮太子拾遺記』に所引だが、時代が後世すぎる。倉本氏も、馬子の建立を否定する)。ましてや、勢威の落ちた宗岡朝臣氏が氏寺を石川郡で持っていたとは、到底思われない。

発掘調査で奈良時代前期に遡る古瓦も当地で出土したというが、これが直ちに蘇我・石川氏の氏寺に結び付くとは限らないと倉本氏も述べる。「馬子の建立」でなければ、石川・宗岡一族の誰が何時、氏寺として創建したのであろうか。『今昔物語』には右京に大邸宅を構えた富豪、大藏史生宗岡高助と娘の話が見えるが、十世紀中葉頃のこの者について氏寺の話も見えないし、高助の死後には娘たちは零落した有様であった。京の朝廷に出仕せずに、河内だけの活動で中下級

官人としての官位を得られるはずもないが、龍泉寺関係文書に見える宗岡一族の名はいっさい他の史料に見えない。天喜五年以降に石川郡で宗岡朝臣氏後裔の活動もまったく知られない。これでは、氏寺保持の財力さえ得られないし、他の氏族にあっても氏寺は平安後期以降とほとんど廃れていた。

なお、上記天喜五年の三六年後の寛治七年(一〇九三)、泉南郡岬町多奈川にある興善寺の釈迦如来像銘文に、結縁の人々の名前が見える。これらが付近の住民を主に撰河泉居住とみられるなか、宗岡行紀・是行が見え、兩名の居地は不明だが、東河内・西河内と限定される人々のなかにはいないから、その他の和泉・撰津なのだろう。

氏寺の立地について、「飛鳥時代には氏族の本拠地に建てられることが多かったが、都に官人貴族が居住するようになると、都の内外に建立されるようになった」と記される『日本古代史大辞典』。これは、藤原氏の興福寺、和氣氏の神護寺などを念頭に置いた表現であろうが、平安時代において石川氏、そして宗岡氏が河内に氏寺を保持していた証拠がない。大和の巨勢寺は、平安時代に興福寺の末寺となり、鎌倉時代には所有財産を春日大社に寄進して、その頃から荒廃し廢寺となっている。

貴族系統の血統保持に貢献した「蔭位の制」にあずかる従五位の叙爵者が、平安中期頃には為成(惟宗改姓の行利もそうか)くらいしか見えないほど、宗岡氏は衰微していたから、この時点で河内に氏寺を保持する力がなかったとみるのが自然である。

龍泉寺の本堂の後に隣接する威古神社は延喜式内社で、江戸時代まで同寺の鎮守社であった。近世には牛頭天王と称され、明治初頭の『特選神名牒』では進乃男神が祭神と云うが、後には、当地付近一帯が紺口県に比定されることで、多氏族たる紺口県主の遠祖・神八井耳命に祭神が改められた。ともあれ、仮に龍泉寺が氏寺として存在したのなら、宗岡朝臣氏

よりも紺口県主かその族裔の氏寺とみたほうが祭祀的にも自然である。例えば、河内国志紀郡土師里の道明寺(大阪府藤井寺市)は、当地の土師氏の氏寺土師寺として小徳冠土師連八嶋(菅原道真の先祖)により推古朝に建立され、境内に土師神社や天徳日命神社があった。同寺は菅原氏の氏寺ともいい、道真の姨の覚寿尼も住持をつとめた。

先に触れたように、一須賀神社あたりの一帯が、蘇我氏同族の流れを引くもの本拠地としてみられ、一須賀古墳群の一角に位置して、中世では当地に石川城が築かれた。清和源氏石川氏は、古族の血を母系から承けていて、同社あたりに発祥し本拠が石川城とされるが、この地は龍泉寺からかなり離れる。源平合戦の時に石川城合戦が行われ、南北朝期にも南朝楠木方の石川城として戦略上の要地で、同社も再三兵火を受けている。

以上の関連する諸事情を見ていくと、結論的には、河内の石川郡に宗岡朝臣氏が居住したとの裏付けがないから、当該四文書はすべて後世の偽造文書ではないかとみたほうが妥当であろう。宗岡氏一族としても、平安期の名前に「公」を用いた者は殆どないのであろう。

すなわち、龍泉寺関係文書を基に、①「河内国石川地方が古くから宗岡一族の所領として存続したことを伝えている」、②「彼らは河内国石川地方を本貫とし、氏寺龍泉寺を営む石川氏にほかならぬ」、③「石川氏一族が、確実に石川の地に根をおろしていたことが知られる」という加藤謙吉氏の見方(『蘇我氏と大和王権』が代表的なものだとすれば、これらは③を除き、疑問が大きい。だからといって、龍泉寺が蘇我氏同族にも関係した可能性を否定するものではない。富田林市域では龍泉寺の西北近隣に須賀の大字もあり、南隣の河内長野市には蘇我一族の高向臣氏の居住地もあったからである。以上は、蘇我・石川氏の活動を具体的に的確に捉えるために

必要な認識である。

(平成三十年十月下旬に記)

邪馬台国畿内説とも関わる近畿農耕社会胎動期の解明

関西大学大学院非常勤講師 森岡 秀人

邪馬台国論争における考古学の立場は、結論を急ぐことなく、膨大な蓄積資料との格闘の中から、直接間接に論争点との関わりをみせる遺跡・遺構・遺物の整合性を読み解くことであろう。したがって、個々人の研究に照らせば、一定の通時的な研究と東アジア世界も射程に入れた地域の比較研究、海外研究が土俵となるべきで、かなりの時日を要することである。私も50年近くの経験を積んできたから、多少邪馬台国の問題に深入りしても、許してはくれるだろう。本来は自由であるが、自粛気味の人は若い方々に多く、基本は考古学とは無関係の世界であると述べる。しかし、私などは当時の概説書や専門書に邪馬台国を基軸とした記述にも採まれて生きてきたので、無関心ではなかった。とくに私たちが10歳代の頃は、佐原真さん、田辺昭三さんが弥生時代の畿内地域という言い方で、その先進性に照準を合わせ、弥生時代から歴史描写を書き起こしていた。「畿内の創造的」な発達・展開は圧倒的に他地域を凌ぐもので、弥生時代前期(新)段階から始まるとされた。そして、弥生の畿内を語る叙述はすべて大和政権の成立を前提として考える必要があるとされた。その舞台が大和と中・南河内であって、畿内中核部の地理的範囲も結構はつきり主張され、大型前方後円墳分布地帯との重なりも多分に意識されたことだった(『日本の考古学』第三巻 弥生時代、一九六六年)。邪馬台国東遷説なども「神武東征の亡霊」などと揶揄的表現が使われていたことを思い出すが、原田大六さんや森浩一さんなどの考古学者との対峙を目指した論文にもなっていた。その影響は大きい。弥生前期(新)段階の創造性ある遺物、遠賀川式土器の畿内的変革や方形周

溝墓の出現、銅鐸のマツリの登場をはじめ、数多くの要素の始まりが近畿中央のこれらの令制国領域に集中し、他の地域をまさに睥睨するような先進文化の一系的発達の先に邪馬台国や初期大和政権が連絡されており、農耕社会としての発達過程は、百余国から三十国の統合への政治的な動きを背景に説明され、卑弥呼・台与の時代は弥生時代後期で三世紀の推移である。古墳は四世紀に入って造られたという評価であった。

三十年程が経過し、数多くの小区画水田跡の整理や集成から農耕の起源問題など生産基盤や生産手段の問題にシフトしたのは一九八八年秋の日本考古学協会静岡大会の頃からである。その時、「近畿」の全資料を発表した私は、邪馬台国の「邪」の文字にも触れていない。近畿の初期農耕をむしろ縄文集団との移行問題として捉え、その同化過程の地域性を論じている。現在は、邪馬台国位置論争などの議論にも多少発言するようになったが、基礎の基礎の検討では、やはり農耕化する社会の基盤研究は看過せず、続ける努力が続けている。さて、それからちょうど三十年がまた経った。日本列島における農耕の始まりとは、土器胎土中の穀物圧痕の検証から、縄文時代前期や後期といった先行出現説はあつという間に撤回していった。そして、本格的な農耕の初期化現象として遠賀川式土器の時代、つまり弥生時代前期の問題が再び脚光を浴び始めている。土器を見る限り一時的と言われることが多いが、農耕化への歩みは西から東への緩やかで長期に及ぶ伝播の内実の見直しが必要だ。

西日本と東日本の間中に位置する近畿は、弥生時代の発達段階から注目されているが、それは三世紀の中頃には始まる古墳時代に、この地域が古墳の古さ、規模や副葬品の質量で飛躍的な高位置にのぼりつめ、飛鳥・奈良・平安時代と順次都城が営まれたという歴史的事実と向き合うからである。前代社会である弥生時代は年代が長くなることも注目されつつあるが、近畿からの発信は沈黙を装ってきた。しかし、この

十五年、潜在的に研究は前進しており、研究の統合化や総括が待ち望まれてきたが、ようやく本書の刊行によって、近畿の調査研究の内容と目指されている方向が明快なものとなった。多彩な分野の研究者、多方面の研究者の緻密で大胆な分析結果が一書にまとまったのは初めてのことであり、その批判と継承は次世代に課せられた大きな課題である。

遠賀川式土器が九段階に弁別されており、初期農耕活動の進化が弥生集落の離合集散を含めた多様な過程で達成されたこと、縄文集団の未裔的文化がいかに水田稲作社会で変化しつつも残影をみせたかなど、荷担者の複雑化の解明にも意は注がれている。この問題はおよそ四年間、近畿を中心とする二十人以上の研究者の地道な調査・研究により進めてきており、一定の成果が合わされ研究書となつてまとまった(森岡秀人・古代学協会編『初期農耕活動と近畿の弥生社会』雄山閣・二〇一八年十月末刊、三〇〇頁)。発売されたのも三〇年ぶりの日本考古学協会静岡大会であったことが隔世の感を抱き、甚だ印象深かった。

会員投稿

(アイウエオ順)

纏向遺跡出土桃核の放射性炭素14年代測定結果並びに邪馬台国問題との関連について

山科 威

本年5月14日朝日新聞夕刊は、第一面に衝撃的な見出し「大型建物 卑弥呼の時代か」で、奈良・纏向遺跡で出土した桃核の放射性炭素14の年代測定結果を報道した。他の大手マスコミ数紙も同様の報道をしている。

纏向遺跡の大型建物遺構の南5メートルの土坑から出土した2800個近くの桃核の内15個を名古屋大学名誉教授中村俊夫氏が、また同時採掘された瓜の種と土器に付着の炭水

化物を近藤玲徳島教育委社会教育主事が、夫々加速器質量分析による放射性炭素C14の年代測定を実施し、西暦1350〜2300年の間であるとの測定結果を発表された。これらの桃や瓜の種と土器片は、大型建物内において、或いはその解体時に行われた祭祀に使われた後、廃棄、埋蔵されたものであり、この測定年代は、魏志倭人伝の言う卑弥呼女王在位の時期とびつたり一致するので、まさに「邪馬台国近畿大和説」を科学的に証明する可能性があると報道されている。

果たして、この測定結果が本当に「近畿大和説」を科学的に実証したのであるか。この測定結果を冷静かつ理論的に受け止めて、邪馬台国問題との関連を検証すれば、下記に論述するように、学問的、論理的に解明しなければならぬ幾つかの問題点が指摘される。

(1) 1350〜2300年の95年間の許容範囲は、社会的、文化的な変遷が緩やかであった石器時代や縄文時代であれば容認できるが、既に激変期に入った1〜3世紀の歴史事象を判定するメルクマールとしては、広すぎるのではなからうか。現実に、近畿地方では2世紀末頃までは、終末期とは言えまだ環濠集落を中心とした銅鐸文化の社会であり、3世紀に入ると今迄の概念を超越した、革新的な計画的都市「纏向」が出現している。従って、桃核がこの95年間のどの時点で放棄埋蔵されたかの判断次第で、時代背景が大きく変わる可能性があり、この年代測定範囲は、当時の歴史を解明する学問的根拠としては、余りにも広過ぎて不適切であると言えるのではなからうか。

(2) 年代測定された桃核は、纏向遺跡大型建物遺構の5メートル南側の土坑から発掘されているので、現在の資料からは両者の直接的な関係は立証されず、大型建物の存在時期を実証するものとは確言出来ない。また、同様に大型建物内で行われた祭祀に使用の後廃棄されたと言う想定も、可能

性はあっても、現在の資料からは直截的に実証できない。

(3) 165年前後〜247年と考えられる卑弥呼女王の生涯と、135年〜230年の桃核測定年代とは微妙なずれがあり、女王が関係した可能性はあっても、前項の大型建物と同様に、それを実証する明確な資料が提示されない限り、女王との直接的な関係は確認出来ない。

(4) 今回の年代測定では、1950年を基準にした国際較正曲線INTCAL13を適用しているが、この較正曲線は欧米の資料を基準に作成されたものであり、異なった自然条件を考慮して作成された我が国独自の較正曲線を基準にすれば、今回の測定年代が、50〜100年も前後に大きく移動する可能性も指摘されており、科学的な測定値と言うものの、絶対的な数値とは断定できず、しかも100年近い許容誤差もあり、現状では上記の通り、大型建物の存在時期や、卑弥呼女王との関連など、歴史問題の科学的な検討資料としては問題があると言えるだろう。

(5) 今回の桃核年代測定の結果について、「邪馬台国近畿大和説」論者の方々は、「大和説」を科学的に実証するものであると、大きな期待を寄せておられるようであるが、その前に、「大和説」には魏志倭人伝の記述内容とに大きな矛盾が存在する事実を、論理的に解明しなければならぬ難問題が介在する。

紙面の関係で詳論は避けるが、魏志倭人伝が3カ所の記事で明示している邪馬台国と近隣諸国との位置関係や、「女王国の東、海を渡る千余里に倭人の国がある」と言う記述、戦時体制下で防備を固めた環濠集落国家であったと言う情景描写などは、大和説が卑弥呼の都と主張する纏向都市の様相と全く合致しない問題などが指摘されている。大和説論者は、魏志倭人伝の記事は遠く離れた中国の史書の記述であり、必ずしも当時の倭国の真相を伝えているとは考えられないので、その記述内容を殆ど無視する立場であることを表明されてい

る。

しかしながら、魏志倭人伝の記述内容は、倭人からのあやふやな伝承証言でなく、二度にわたる魏の使節達、複数の客観的な第三者による直接的な現場目撃証言であり、第一「邪馬台国」の名称そのものが我が国の史書や伝承には一切記録が無く、唯一倭人伝のみが、その名称と実態を今日に伝えており、その記述内容を無視した邪馬台国論は学問的に絶対に成立する筈がないだろう。

このように否定出来ない魏志倭人伝記述内容との幾つかの矛盾点を、論理的に解明しなければならないことが、「邪馬台国近畿大和説」論者がどのようにしてもクリアしなればならないハードルであり、それが出来ない限り「大和説」は成立しないと確言出来る。

結論的に、此の度発表された桃核の「放射性炭素C14年代測定結果」からは、現在の資料では纏向遺跡の「大型建物の存在年代」及び「邪馬台国卑弥呼女王」との直接的な関連を客観的に解明するものでないことは、上記に詳述の通りである。従って、この測定年代は貴重な資料であるものの、その測定年代の時期に、誰が或いはどのようなグループが、どのような状況でその地に廃棄、埋蔵したのかを探求しなければならぬ、新しい古代史の研究問題を提起したことになる。世論に大きな影響力を持つ大手マスコミ各紙が、このように学術的にまだまだ未解決な問題を抱えた測定結果を、十分に納得のできる検証もしないまま、あたかも「大和説」を科学的に実証するかのような安易な報道によって、世論をその方向に誘導するような結果になれば、真実を追求し報道しなければならぬマスコミの立場からすれば、まことに無責任極まりない行為ではなからうかと懸念する次第である。

わが圖書を語る

『卑弥呼Xファイル 驚愕の邪馬台国論』

たま出版(2017年5月20日) 1620円(税込)

狗奴国は句麗国(高句麗)だ！ <http://www.kingch.jp>

著者：黒澤 一功(クロサワイッコウ)

内容(狗奴国王・倭の五王の実名・初公開)

○狗奴国はロケーションが違う2つの国だった。

A：倭人の新定義。倭地複数・倭国外地説。

B：帯方郡起点三放射説。帯方郡は大同江下流域。

C：邪馬壹國九州大分・宇佐。九州王朝は大和王朝とは別系統。

D：卑弥呼・金印紫綬の徐綬は景初2年。

E：狗奴国その一(元名：句麗国)：「其南有狗奴国、男子

為王。其官有狗古智卑狗、不属女王」は、伯済国の古爾王。

F：狗奴国その二(元名：句麗国)：「倭女王卑弥呼與狗奴国

男王卑弥弓呼素不和」は高句麗の東川王。

G：倭儒国鹿兒島県説。

H：卑弥呼は公孫度の娘、尉仇台をに嫁いでいた。

I：倭の五王・倭王武は百済の東城王。



『邪馬台国は四国だった』
「女王卑弥呼の都は松山」

¥1760 アマゾンプリントオンデマンド出版

eブックランド

海戸 夕真

魏志倭人伝に書かれた行程の中で、『一大國』が杵岐の島であり、原の辻遺跡に逗留した事は確かであるとされていす。然るに杵岐の島からの航路の方向が書かれていない為、様々な説が登場する原因となりました。私は『末盧國』の字の意味を『漢字源』で調べ、『末盧國』には『末端の壺型の』という意味がある事を知りました。本州の末端にある下関市豊浦町の室津は壺型をした入江です。この地に上陸した一行は、半島を南下しさらに東行し、『伊都國』『奴國』『不彌國』へと向かったと思われます。『不彌國』からは迎えの船に乗り、水行十日陸行一月の大きさを誇る邪馬台国(四国)へと向かったと考えられます。邪馬台国は海に絶在する島大陸であると書かれており、四国は世界で50番目の大きさを誇る島大陸です。邪馬台国21ヶ國の国名が、音韻として今も四国の地名に残っています。



『天皇家の卑弥呼 ～誰も気づかなかつた3世紀の日本～』
鳥影社 定価(本体1,500円+税)

深田 浩市

卑弥呼とは？ 台与とは？ 狗奴国の卑弥呼とは？
難升米とは？

前例のない圧巻の説得力を持つ画期的な新説で、『卑弥呼』
擁立の真の理由、そして魏志倭人伝の登場人物たちの正体が
明らかになる！

○天照大神の「后」である齋王

○その時ヤマトは○○時代だった

○朝貢しない「男王」の謎

○謎の皇女「倭迹迹姫」とは誰か

○讃岐に疎開していた少女ヒミコ

○二倍年暦で最後のカギが合った

○史上初！ 全ての齟齬がなくなった年表が完成した

○倭国大乱の真実は

○「卑弥呼」の墓から遣魏使の目的を見る

本書は、魏志などの記事、日本書紀など日本の古典や伝承
を緻密に調べ上げ、科学的調査との整合性とも逸脱せずに、
3世紀当時の日本のすがたを、はじめて論理的に明らかにし

た。



多くの新説で埋め尽くされた、しかし有無を言わさぬ説得力を持つまったく新しい「邪馬台国論」である。

『コペテン 邪馬台国』

文芸社(1,400円税別)

村山 智浩

魏志倭人伝、これについて二言目には「邪馬台国比定地論」となっていないだろうか？そしてそれを風刺するが如く「議論はし尽された」という考古学的見解すら散見される。果たして比定地論にすぐ飛びつけるほど魏志倭人伝の解釈は施されているのであろうか？率直に言って何も終わっていないし、施されてもいない。未検証のまま通説・定説化されているものが少なく無い。この実態すら比定地論ばかりが先行するあまり有耶無耶になってしまい、論拠無き前提・設定が用いられる……。

本書はそのような通説・定説が果たして如何なものか？

これについて再検証し、魏志倭人伝の実像に迫った書である。是非のご一読の上、今後の自身の研鑽としてご意見賜りたく思う所存である。

村山智浩

『邪馬台国・日向への道』

(欽脈社「みやぎ文庫」2007年3月1890円)

山田 昌行

邪馬台国を探す唯一の客観的文献史料である「魏志倭人伝」があまりにも改竄・骨抜きにされて、北部九州説や、纏向説に傾いている。

しかし魏使が倭国へやってきた目的・ミッションは何かという観点から吟味すると、外交の窓口である伊都国をさしおいて、魏使が連合西端の末盧国に上陸したのは、倭人伝を書くため諸国を国勢調査する巡行の第一歩であったと読める。不弥国の比定が曖昧だ。そこは今も残る宇美で、のちに大宰府が置かれた、九州の東西南北の交通の要衝だった。

不弥国からは次の国への距離が里数から日数に変わるの、帯方郡の資料にデータが無かったから。邪馬台国へは、筑後川筋をさかのぼる日田往還を行くのが通常のルートで、それが郡から「万二千余里」であった。

不弥国から投馬国へは「南水行」。水行は海上とは限らない。宝満川を川舟で下る。大河・筑後川には橋が架けられていなかったから、そのまま舟を進め、有明海に出て宇土半島基部の投馬国の都邑に着いた。水行二十日。戸数5万の大國・投馬国には、遠まわりしてでも行かなければならなかった。郡の資料には里程が無かったので日数で表すほかなかった。

投馬国は、ほぼ熊本県域で、今も球磨(郡・川)・熊本・限の地名がある。当時の九州の発音「トウマ」を魏使が「投馬」と音写した。当時の発音は力行とタ行が未分化であった。

投馬国からまた有明海を南行十日、邪馬台国領域の川内に着く。ここから川内川筋をさかのぼり、峠を越えて大淀川筋に出る九州山地横断に1月を要した。

こうして魏使一行は、戸数7万という倭連合最大の邪馬台国の都・日向の西都に着いた。日向であれば、古事記・日本書紀の日向神話や神武東遷とつながる。

(了)

著者略歴

1938年、福島県生まれ

福島高校、東京教育大学理学部地理学科卒業 出版社勤務

著作

梓書院合同出版「私の邪馬台国論」

Vol.2 魏使一行諸国巡行パレードから読み解く「邪馬台国日向論」

Vol.3 「倭国(九州)と東倭国」

山と溪谷2004年7月号「日本百高山特集」



編集局だより

今回も顧問の先生と会員から多くの投稿をいただきました。御礼申しあげます。

【訃報】全国邪馬台国連絡協議会監事の本山裕彦氏が十一月にご逝去されました。

本山氏は入退院を繰り返されながらも当会の理事会や執行委員会に参加し、運営に関して熱心に多くの助言をしてくださいました。ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。